

滅ぼす 上・下

Anéantir

評・森本 あんり（神学者
東京女子大学長）

本書を書評する資格がわたしにあるかどうかかわからない。これまで十を超える小説や評論が邦訳されている作家だが、読んだことがあるのは二〇一五年刊の『服従』だけで、それを思い出したのも本書をだいたい読み進めた後だったくらい

仏大統領選巡る家族の愛

不気味な題名が「何を」の説明を拒んでいたことに思い至る。



河出書房新社
上2420円、下2585円

だから。それでも紹介したいと思った。設定は二〇二六年のフランス。今よりiPhoneが数世代進んだだけの近未来だが、重要なのはそれが大統領選挙の前年にあたっていることだ。物語は候補の一人とも目される経済担当大臣のギロチン断首というグロテスクなフェイク映像がネット上に流され、政府サイトがハッキングされる、という事件で幕を開ける。犯人の正体や目的も不明なまま、第二第三のサイバートロが繰り返され、しかも現実の殺戮行為へとエスカレートしてゆく。

ここまで読めば、本書の主題は大統領選挙とそれを脅かすテロリズムだ、と誰もが思うだろう。だが、下巻に入ると物語の叙述は大臣室の要職を務める主人公ポールとその妻や家族の細やかな愛情の交歓へと転移し、ある事実の判明から思いもよらぬ結末へと急転回する。読者はそこではじめて、『滅ぼす』という本書の不気味な題名が「何を」の説明を拒んでいたことに思い至る。宗教をめぐる問題発言でしばしば批判される著者だが、本書の後半は世界の存在や生命の尊厳、幸福論や決定論など、ほとんど神学書といってよい様相を呈している。ポールの妹はフランスではもはや少数派となったカトリック信者だし、妻は環境系新宗教に惹かれており、やがて無信仰なポールにも自分自身への抜き差しならぬ問いが迫ってくる。話の展開に何となく筋違いの感触が残るが、それは狙い通りなのかもしれない。重要と思われたことがそうではなく、人生の優先順位は大きく変わることがある。自分の命が自分のものでないことを教えてくれるのは愛である。男性に仕える女性という描き方には問題を感ずるが、ともかく「措く能わざる」本で、読後感は清々しかった。やっぱり素人の感想です。野崎歓、齋藤可津子、木内堯記。

◇ Michel Houellebecq = 1956年、フランス・レニニオン島生まれ。著書に『素粒子』『地図と領土』など。